

作品づくりだけでなく、 環境・保存・災害・まちづくりに 建築家の能力を使う意味

JIA 建築大会 2017 四国、4会議合同シンポジウムを通して



JIA まちづくり会議
議長
連 健夫

昨年の四国大会において、シンポジウム「ストック活用を環境・保存・災害・まちづくりの視点で考える」が行われた。これはJIAの4会議合同主催で、毎回のJIA大会時に行われている。四国大会での副題は「空き家・空き地問題解決! どう活かすか!」。150名を超す参加者の中、熱いディスカッションとなった。

■分野横断的視点が大切

このシンポジウムの目的は、①JIA内で各委員会の活動は活発であるが、分野横断的展開が弱いので、それを繋げる意味、②ストック活用は大切なテーマで、それをどう捉え、どう手立てをするかについての実効性のある方法を得る、ことである。

プレゼンテーションとして、「環境」からは袴田喜夫氏が「残したい、取り戻したい大きな環境」について四国剣山系の自然を例として、ストックを「良好な環境」として捉えることの大切さを指摘した。「保存」からは篠田義男氏がストックを活かす仕組みとしてJIA文化財修復塾の説明と全国各支部連携事例として、歴史的建築物活用における建築基準法3条適用の可能性について言及された。「災害」からは芳賀沼整氏が、東日本大震災時に仮設住宅を再利用前提に設計された事例紹介とともに、各地域に合った多様な再利用メニューの必要性を指摘された。「まちづくり」からは亀井尚志氏がリノベーションまちづくりの視点を400m、徒歩5分のスモールエリアで捉えることの大切さを事例を通して指摘した。筆者は、英国CABEの事例を挙げ、良質な建築、美しいまちづくりはデザインレビューなど協議調整の仕組みづくりがポイントであり、そこにデザインのできる建築家に関わることが大切であることを指摘した。

コメントとして小玉祐一郎氏は、気候風土を捉えることの必要性、建築環境賞など優れたものを奨励する仕掛けの有効性を指摘した。原真佐実氏は保存再生において悩ましいのは経済性の観点であり、理想と現実との折り合いをいかにつけるかがポイントであると指摘した。松本純一郎氏は、災害時活動について、行政対応を含め、既存制度について理解することの大切さを指摘した。

ディスカッションでは、空き家空き地は、都市と郊外とは状況が異なるので分けて考える必要がある、何を残して何を継承するかについてさまざまな立場の人を巻き込んで議論する必要がある、材料における地域性は常に意識する必要がある、実効性ある活動にするためには他団体との連携が必要である、協議調整の仕組みを作るには行政との信頼関係構築が前提、などが議論された。

■公益的活動に関わる意味

建築家の職能として、建物の設計という作品づくりがあろう。建築設計は建築、設備、構造との調整、施主や施工者との調整役を担う中で、建築概念を具現化する職能といえる。この調整能力を建築設計のみならず、公益的活動に使うことが求められている。

このシンポジウムの目標は、既存ストックを地域資産として捉え、それを世のため人のために、うまく活かしていくことである。それを実効性のあるものにするべく各分野から分野横断的視点、他団体の連携、行政との関係、建築家の能力を活かすための仕組みを論じているのである。この内容は常に公益性をベースにしており、作品づくりの技術を論じているのではない。ここには、建築家の能力を公益性のあるものを使うことにより、良質な建築、美しいまちづくりになるとの共通理解がある。もちろん建築家の能力と時間を使うのであり、適切な報酬が必要なことは言うまでもなく、その仕組みをつくることも併せて求められている。

次回、JIA建築家大会2018東京で、当4会議合同シンポジウムは、重要プログラムとして9月15日の午前アレンジされた。ぜひ、多くの方にご来訪いただきたい。



JIA 建築大会 2017 四国、4会議合同シンポジウム